

「その人は信じて帰途についた」 50節

1.はじめに

- ・カナンにつぐ2度目のしるしである。(奇跡)
- ・特にイエスと役人との関わりを考える。(人間関係)

2. 本文

- ・47節 「下ってきて、息子をいやしてくださるように願った。」
- ・48節 「しるしと不思議を見ないかぎり、決して信じない。」
- ・49節 「私の子供が死なないうちに下ってきてください。」
- ・50節 「帰って行きなさい。あなたの息子は直っています。」
- ・53節 そして彼自身と彼の家の者がみな信じた。

① 物語を2つの側面で考えたい。①は奇跡(しるし)、②は人間関係。

- ・①奇跡については、ヨハネは54節で「またこのことを第2のしるしとして行われたのである。」と記している。本文を読んで素直に理解できる事柄と思います。奇跡はイエスの福音にとって重要なことでもあります。ここでは「奇跡」について重要なことを述べたいと思います。

i) マルコ6：4～6 奇跡を信仰において受け入れた。

ii) マルコ6：45～52 全能思想ではなく、闇と嵐のなかで、近づくイエスに「可能を可能とする神」の全能を信じた。

- ・役人は仕事柄ユダヤ教についてある程度知っていただろう。また、イエスの噂、イエスの行いも聞いていただろう。今、自分の息子が死にそうな状況の時、イエスの「ことば」を信じて帰った。そして癒されたことを知った。信仰は「全能思想」のような静止、観念、知識ではなく、働く、動くことによって信仰となる。

・奇跡は役人にとっては反自然法則の現象でなく、イエスの愛であった。

② イエスと役人との関わり。

- ・私達の日常の他者との関わりは挨拶とか、何気ない話、交流、段取りのようなものがほとんどです。ここでは役人とイエスとの関わりは緊張を持っている。福音書で語られているイエスと他者の関わりは緊張をもっている場面が編集されている。ここでは「願う者」と「叶える者」、「異邦人」と「イスラエルの滅びた家に遣わされた者」という関係にあった。

- ・この関係は最初、相手が異邦人であることとイエスの使命との対決です。48節「しるしと不思議を見ない限り、決して信じない。」しかし役人の必死の願いによって、イエスに変化が生まれた。50節「帰って行きなさい。あなたの息子は直っています。」。そのことは役人を変化させた。役人自身と家の者がみな信じた(53節)からである。イエスのかかわり(愛)は役人を変化させ、信仰を得させたのです。

・このことから私たちはなにに関心をもつべきか。

i) 真実をもって立ち向かう—(衝突について)

- ・衝突は良くも悪くもないし、正しいとも誤っているとも言えない。人生に衝突はつきものです。
- ・私たちが緊張する場面で選択する5つのパターン。
  - ・勝つか負けるかをつける。(他者との関係の破綻または相手を理解させるため)
  - ・身を引く。(問題点が理解されない)
  - ・自分が譲歩する。(他者との関係の保持、しかし目的はこれから。)
  - ・歩み寄って妥協する。(他者との関係の保持、しかし目的はどうなるか。)
  - ・愛をもって立ち向かう。

## ii) 愛と真実 (イエスにあっての真実)

- ・ I コリント 13 : 4 ~ 7 「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。～・・・」述語を主語にしたら、親切は愛です。ねたまないのは愛です。自慢しないのは愛です。という言葉に変わります。愛という崇高な観念・理念という思い込みから、私たちの日常生活の行いとして考えることは重要です。
  - ・ 愛をともなう真実は人を癒す。  
愛をこめて語られる真実は、私たちを成長させる。  
愛をもって語られる真実は変化をもたらす。
  - ・ 真実 (真理) と愛とは、しっかりした人間関係に必要な、2つの要素です。
- ・ 神はこのようなやり方で人間と接してくださる。しかし神は別の表現を使います。
  - ・ I コリント 10 : 13、ヘブル 12 : 5 ~ 7 (試練、懲らしめ)
    - ・ 神のさばき一徹的な真理の追究を再度求める。
    - ・ 神の恵み一値しない者に注がれる愛。
      - ・ 神が愛の手を差し伸べるだけだったら、安っぽい恵みにすぎなくなる。
      - ・ 神が全てを赦すとは、天国ではなんでもまかり通ることを意味しない。
  - ・ ガラテヤ 5 : 14 ~ 15 律法の全体は「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」
  - ・ エペソ 4 : 15 ~ 16 むしろ愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長

## 3. おわりに

- ・ 私たちは他者との緊張関係において5つのパターンを知っている。私たちは議論し、相談し、教会の一致を求める。それによって力と希望を得る。イエスは5つのパターンにおいて、譲歩と妥協ははされなかったと理解します。しかし人は時には譲歩と妥協が最善の選択にもなりうる。同時に目標は次の課題となります。その過程の中で、親切をもって、ねたみを持たず、私たちの目的が語られるのならば、「愛において親身にぶつかる」ことによって、主の喜ばれる共同体の実現がなされると思います。